ジェンダーセッション第 9 回(2000.3.11)

## 男たちの子育て～シングルファーザーの体験から～

# 育児と育自の十年史

土堤内昭雄（ニッセイ基礎研究所 社会研究部門 主任研究員）

### 1. はじめに

わが国では、子育ては母親がするものという固定的な性別分業が定着している。男女共同参画社会と言いながら、女性の仕事への参加は進む一方で、男性の家事・育児参加は低調だ。このような性別分業は、女性の人生を制約する女性問題として語られるが、実は立場を逆転すると男性の生き方にも大きな制約となっている。三歳までの幼い子どもの成育には母親が欠かせないという三歳児神話や、子どもを育てるのは母親の方が望ましいとする母性神話の呪縛から解き放たれ、既存の性別分業に基づく様々な社会制度の変革が、母親のみならず父親の人生の可能性を広げることにつながる。ひとりの父親として子育てと出会い、子育てを通して感じたことや考えたことを話そう。

### 2. 僕の子育て

育児は相手が人間であり常に変化している。計画的に考えてもなかなか思うようには行かない。特に、乳幼児期の子育てはそうだ。時々、子どもに対してヒステリックに怒る母親の姿を見かけるが、女性は感情的だからというのは全く当たらない。冷静で気持ちにゆとりがある時は子どもに優しく接することができるが、予定通りに行かないことが続くと誰しもヒステリックになる。父親も子育てに深くかかわると決して例外ではない。

10 年経ち子どもたちは中学生になった。子どもを育てていると子どもたちの感性や発想の豊かさに驚かされることがある。子どものおかげで自分の中から消えかけていた感性が蘇ってくることもある。子育ては子どもの目を通してもう一度新たな人生を体験することでもある。確かに子育ては大変なことも多いが、この 10 年間を振り返ってみると不思議に記憶に残っていることは楽しい

ことばかりだ。人には子どもを育て上げようとする気持ち、弱い者を守ろうとする気持ちが備わっているのだと思う。

### 3. 育児と育自

「父親の発達心理学」（柏木惠子編著／川島書店／93 年）は、親は子どもの育児にどのような影響を与えるのかといった従来の研究視点とは全く異なり、子どもの育児が親自身の発達にどのような影響を与えるのかを研究している。単に「父親であること」ではなく「父親になること」のなかで親は発達を遂げ、育児による親の生涯発達について明らかにしている。つまり父親は育児を通して「父親である」ことから「父親になる」という発達を遂げる。この 10 年間の子育ての体験から、男性も育児を通して親になっていくこと、父親にも十分子育てができることを知った。

子育てとは自分育てだ。何故なら子育ては子どもに「ああしろ、こうしろ」と言うことではなく、大事なメッセージを親の背中を通して伝えることだ。子どもをどう育てるかは、自分が親として、ひとりの人間としてどう生きるかということと同じだ。即ち、子育てという「育児」が親自身を育てる「育自」を意味している。子どもとの係わりの中から子どもの可能性を発見し、それを伸ばす「育児」と同時に、自分の新たな可能性を発見して自分を育てていく「育自」が表裏一体の関係にあり、「育児は育自」であると実感している。

### 4. 育児とジェンダー

父親が子育てをしていると様々な問題に直面する。小学校の保護者会に出席しようとすると、開催日時が平日の午後などフルタイム就業者にとっては非常に参加が難しい時間設定だ。結果として殆どの参加者は専業主婦ということになる。先生方からもいつも「お母さん方」と語りかけられ、なにか存在を無視されたような寂しさを覚える。学校の電話による連絡網でも、開口一番「奥様をお願いします」と言われることが多い。僕が父親なのだから子どもの学校のことは何でも話してくれれば良いのだが･･･。

二人の子どもが横浜の保育園に通っていた時、保育園で交通安全教室が開かれた。その時のパンフレットを見てとても驚いた。表紙には『母と子の交通安全のしおり／おかあさん！あなたの手で事故から子どもを守りましょう』と書

いてある。裏表紙には『あっ、あぶない！では遅すぎます／母親がそばについていながら、子どもが事故に･･･ これは、おかあさんのちょっとした油断や不注意が原因です。おかあさん、あなたはだいじょうぶですか』とある。次世代を担う子どもを交通事故から守るのは、保護者の責任と同時に社会全体の責任だが、このパンフレットでは子どもの交通安全の責任はすべて母親が負っているかのようだ。少なくとも保育園に送り迎えをする親は、多くの人の力を借りながら子どもを育てており、僕自身もどれだけ子どもの交通安全には気を配っているか計り知れない。このような公的な印刷物に、男は仕事、女は育児といった性別分業を当然視した表現が使われることは、甚だしい行政の時代錯誤だ。育児を母親だけに帰することは、父親にとってはこの上ない逆差別だ。父親がどんな思いで子育てをしているのか分かっているのだろうか。そこには間違いなく母性でも父性でもない人間として子どもを慈しむ親性があることが意識の上から欠落しているのである。

マスコミの報道の中にも性別分業を前提としたような記事が見られる。たとえばある新聞記事の見出しが「昼寝の三幼児死亡／母の外出中、宿舎全焼」となっている。この痛ましい事故は会社の宿舎が全焼し、焼け跡から社員の三人の幼い子どもが焼死体で見つかったというものだ。出火当時、父親は出勤しており、母親は近所に買い物に出かけていたという。ここで問題なのは何故見出しの中でわざわざ「母の外出中」と付け加えねばならなかったのかということだ。家を留守にする場合、子どもの安全管理は親の責務であり、父親も仕事であろうと外出中であれば母親と同様の義務を負っているはずだ。書くとすれば「両親の外出中」とすべきではないか。これは恐らくマスコミの「育児は母親がすべきもの」という固定観念が背景にあるのだろう。

## 5. 親子の「個育て」

小学校のある学期始めの保護者会で、先生のお話のあとに懇親会があり順番に自己紹介をすることになった。最初の人が、「○○の母です。宜しくお願いします。」と言い、次の人も、その次の人も同様だった。僕の記憶する限りでは自分の名前を名乗ったのは僕以外にひとりとしていなかった。確かに「○○の母」という言い方は、自然ではあるが、保護者同士の懇親会ならば、「○○の母」の前に自分の名前を名乗るのが当然だろう。女性が「○○の母」や「○○の妻」「○○の娘」という前に、日頃からまずひとりのおとなとして自分の「個」を大切にすることが重要だ。何故なら、親として「個」を確立しないと、子どもを分

身と見なしたり、特に母子癒着などということが起こる。最近、「ENPTY NEST（空の巣）症候群」といわれるように、夫の定年後や子育て終了後に、妻や母だった女性たちが生きる目標を失ってしまう現象を耳にする。特に、高齢社会は長寿社会であり、子育て期以降に 30 年以上の時間が残されている。これは昔の「余生」といった余った人生のことではないはずで、むしろ人生の収穫期とも言えるこの時間を有意義に生きていく上でも、ひとりの「個」としての生き方を確立しておくことが重要だ。

子どもが小さい頃、毎週末親子で公園に出かけた。公園で彼らはひとりでトコトコ歩き出し、少し僕から離れるとこちらを振り返って僕の居場所を確認し、またトコトコと歩き出す。そしてまたこちらを振り返り僕の位置を確認する。これを何度も繰り返し、彼らはどんどん遠くへ遠くへと離れていく。このような子どもの行動を見ながら、子育てにおいて子どもと強い絆を作り、その絆が太ければ太いほどお互いが自立し、遠くへ行くことができるのだと思った。「子育て」の究極の目標はやはり親子の「個育て」である。

## 6. 子育てを楽しめる社会へ

最近では、高齢化と並んで少子化が話題にのぼることが多い。国も少子化は深刻な社会問題との認識で、国民会議を設けて対応を協議している。女性が生涯に生む子どもの数の平均値である合計特殊出生率は低下傾向が続き、98 年は 1.38 で総人口を維持するための人口置換水準 2.08 を大きく下回っている。

少子化に対して重要な視点は、子育ての社会化ということだ。兄弟姉妹がたくさんいた時代には、子どもも三人集まれば最小単位の社会を形成するように家庭にいながら社会性を育むチャンスがあったが、ひとりっ子が増えた現在ではそれも難しい。今後、ますます社会が成熟化する中で、子どもたちに多様な価値観を身につけさせることがきわめて重要だ。そのためには、家庭だけで子育てを担うことには限界があり、多様な価値観が育める社会全体による子育てが不可欠だ。それもできる限り幅広い人々の参画が求められる。

日本では女性の仕事と育児の両立を支援するために延長保育や、場合によっては深夜保育の要望が出されるが、考えてみるとそれは今の企業中心社会の働き方を前提とした対症療法であり、本来の豊かな社会とは大きくかけ離れている。日本のように長時間労働に長時間通勤が当たり前になってしまった社会には、やはり原点に立ちかえってノーマルな働き方やノーマルな生活とは何かということを問い直すことが必要だ。職場には女性総合職や管理職も徐々に増加

しているが、彼女たちの働き方を見ていると、従来の企業中心社会の男性の働き方と大差がないように思える。本当は、社会全体が個人生活にもっと重きを置いた、ノーマルな働き方を前提とした男女共同参画社会の実現が求められているのではないか。子育てにおける親離れ・子離れと同様に、「個」の確立との観点からの会社離れも成熟社会には重要だ。

子育てを楽しめる社会を実現するためには、「子育ては母親がするもの」という性別分業に基づく固定的な役割を前提に考えるのではなく、既存の性の役割を超えた世界から社会の課題や解決の方向性を考えてみると、案外簡単に答えが見つかるのではないだろうか。10年にわたる「育児と育自」からこんなことを考える日々である。